

# 『二人の母—1850年代』

## —母親の座をめぐる対立—

木 戸 美 幸

### はじめに

*The Old Maid: The 'Fifties* (『二人の母—1850年代』) をEdith Whartonは1921年初めに書きあげたものの、婚外子をめぐる二人の女性を描いた「不道德」な内容が原因で、数社の出版社から買いとりを拒否された<sup>1)</sup>。ところがアメリカ社会の道徳の向上に寄与することが受賞理由のひとつであるピューリツァー賞を*The Age of Innocence*が1921年5月に受賞したことによって<sup>2)</sup>、『二人の母—1850年代』を含む四編の中編小説*False Dawn: The 'Forties*、*The Spark: The 'Sixties*、*New Year's Day: The 'Seventies*は*Old New York*というタイトルの四巻本として1924年5月に出版された。第一次世界大戦後二十年間にわたって書かれたウォートンの作品については、経済的大成功をもたらした世間の高い支持に反して、文学作品としての評価は必ずしも高いものばかりではなかった。近年、作家人生後半における作品の見直しが進みつつあるなかで、『二人の母—1850年代』は出版当時から高い評価を受けてきた作品である。たとえばLloyd Morrisは*New York Times*にアメリカ文学作品中、もっとも美しい作品としての名声を保持すると書いたほどである<sup>3)</sup>。

ウォートンは登場人物の心理的緊張を高めるために、より長い時間の経過を作品のなかで扱う必要性を感じ、短編小説ではなく、中篇小説がその手法としてふさわしいと考えた。その意味でも『二人の母—1850年代』はまことにすきのない作品である。作品は「質素だが豊かに」<sup>4)</sup> ニューヨーク上流社会を支配していた数家族のうち、the Ralstons (ラルストン家) 第四代当主James

Ralston (ジェームズ・ラルストン) に、1840年9月に20歳で嫁いだDelia Lovell (ディーリア・ラヴェル) の後半生を描く。作品はディーリアの二人の子どもが結婚によって独立した後、養女にした娘の結婚式前夜を迎えた場面で結末となっており、結婚し、母親となり、「家庭の天使」として父権制社会に貢献することが女性の規範であった社会においては、女性の生涯でもっとも変化の大きな、そして重要な意味をもつ年代に焦点をあわせて舞台設定がなされているといえよう。

この作品は主にディーリアの視点に立って描かれるが、娘Tina (ティーナ) をディーリアに奪われたディーリアのいとこCharlotte Lovell (シャーロット・ラヴェル) が、むしろ作品の主たる存在であるとする批評家が多い<sup>5)</sup>。自分自身が不義の子であるとの噂を耳にしたことのあるウォートンが、それを題材に用いた可能性はないとはいえないものの<sup>6)</sup>、この作品における作家の主眼は、不義の結果生まれた子どもの存在の是非ではなく、不義を犯すにいたる女性の生き方と、女性の社会での受けとめられ方への問いであることをこの拙論で示したいと思う。この作品を執筆したとき、ウォートンは59歳であり、実生活での妻としての生活(23~51歳)も、愛人としての生活(46~48歳)も破綻して久しく、しかも彼女自身は母親となることなく生涯を終えている。人生の終盤に入って、実際には経験のない母親としての視点から作品を書いた意図はどこにあるのだろうか。そもそも母親となることは、とりわけこの時代において、社会的・文化的にどのような意味をもっていたのであろうか。

アメリカにおける女性史や家族史の分野では、1830年代から20世紀初頭までをイギリスのヴィクトリア女王治世の時代(1837~1901年)と並行してヴィクトリア時代と呼ぶが、それは男女の役割を明確に区分した時代であった。女性に課せられた役割は「家庭の天使」であり、従順で純潔な娘が、貞節で高潔な妻となり、母親となって家庭にとどまることを求められた。『二人の母—1850年代』は理想的な「家庭の天使」ディーリアと、婚外子ティーナを産んだシャーロットの心理的対決を描いた作品である。この拙論ではまず、対称的な二人の女性が社会的・文化的にもつ役割を考察し、次にティーナをめぐる二人の対

立に焦点をあてて、作品にこめられた女性の生き方に対するウォートンのメッセージを読みとる。

## I

『二人の母—1850年代』は、ニューヨークの黎明期を語る歴史小説さながらに、初期移民のひとりJohn Frederick Ralston（ジョン・フレデリック・ラルストン）を初代とするラルストーン一族の興隆についての、三ページ半にわたる記述で始まる。「宗教上の信条から死ぬためにではなく、銀行口座を求めて生きるために」（83-84）イギリスから新大陸へ渡ってきた現実主義のラルストーン家の人々は、堅実な商売によって財を築く一方、質実な生活を送ることで富の蓄積に余念がなかった。さらに一族の富が拡大していった大きな要因は、「『没落傾向にある』」（84）一族の娘を嫁にとらないようにとの、ジョンから息子への忠告に明らかである。安定した経済生活と社会階層を守るために、特定の地域共同体や親族集団内での結婚が手段とされたのである。事実、ニューヨーク上流社会を舞台とした他の作品同様、ウォートンが『二人の母—1850年代』で描く登場人物はすべて「バッテリー公園からユニオン・スクエア」（92）内に居を構え、それぞれが血縁と婚姻によって分かちがたく結ばれている。祖先が築きあげた財産・社会的地位・家系は、その父の嫡出の長男によって継承されるべく、長男の嫁には嫡出男子の出産と育児という義務が課せられることとなる。ラルストーン一族の新天地ニューヨークにおける成功の歴史は、四代目当主に嫁いだディーリアが暗黙のうちに背負っている家父長制家庭の妻・母親としての義務を明確にする導入部として描かれているといえよう。それはまた、初代から一代目、二代目、三代目を通じて「守ってきた」（85）家父長制社会の秩序の根本であり、分家のJoe Ralston（ジョー・ラルストン）にまもなく嫁ぐシャーロットにも遵守することが当然求められるものである。

ここで小説の焦点は、「自分のすてきな寝室」（87）で、週内に予定されているシャーロットの挙式用の贈り物を見つめるディーリアへと絞られていく。寝

室という空間設定と挙式を控えたという時間設定はウォートンが描こうとする家父長制家庭に閉じこめられた女性を象徴している。シャーロットとディーリアの夫のいとこジョーとの「この結婚が健全で、安全で、ふさわしいこと」(88)は疑問の余地がない、と判断を下すのは、ジェームズ・ラルストン夫人としてのディーリアである。つまりそれは家父長制社会によって支配されている女性の思考回路なのだ。視界に「大きなダブルベッド」(88)を捉えたディーリアの想いは結婚式という儀式の後に待つ新婚生活へと流れるが、性的に無知な花嫁に、当然の義務として要求される母親になるための行為は、すでに二児の母親であるディーリアにとっても、決して満足のいくものでないことに注目しなければならない。「若い男性の理解しがたい火急事態に驚き、とまどいつつ身を任せた」(88)結果、子どもが生まれるのは、妻としての義務を果たしたことを意味しても、ディーリアに精神的充足をもたらしてはいないのである。つまり、表面上従順に「家庭の天使」としての義務を果たしつつ、ディーリアの心の中には、家父長制の支配下に生きることへの不満がくすぶっていることを示しているといえよう。「『すべてを償う』はずなのに、そうではない赤ちゃん—本当にいとしいのだが、自分がなくしてしまったものが何であったのかも、何を償ってくれるはずであったのかも、はっきりとはわからない」(88)子どもの存在は、ディーリアにとって母親業が強制された義務でしかないことを認識させるのである。

ディーリアが妻、そして母親となるために（この二つの女性の役割は家父長制家庭では不可分である）「なくしてしまったもの」を象徴するのが、彼女の寝室に置かれためっき時計だ。パリに住む伯母からの結婚祝いとして手にしたこの置き時計を、「居間の炉棚に飾るかわりに、自分の寝室に」(90)置くことは家族から好ましく思われなかったという。従順なディーリアがこの時計に固執し、自分だけの私的な空間に置いたのは、これを伯母から託ってきたのが、彼女が結婚前に心ひかれていたClement Spender（クレメント・スペンダー）であるからにはほかならない。つまり、青年羊飼いが羊飼いの娘の唇を盗むデザインのこの時計は、今も変わらぬクレメントへのディーリアの想いを象徴している。

家父長制社会を支える女性は、女性にだけ与えられた再生産能力を活かす生き方しか許されておらず、しかも私的世界の中に閉じこめられ、娘時代は父親の、妻となつてからは夫の管理下に置かれるため、自分の人生を預ける選択の対象はごく限られている。スペンダー家は、初代ラルストーンが「『没落傾向にある』」(84)と名指した一族のひとつであり、しかもクレメントは「ニューヨークで法律をするためにローマで絵画をすることをあきらめ」(89)なかったために、経済的にディーリアを支えることはできなかつたわけであり、彼との結婚をディーリアが選択することはありえなかつた。

ニューヨーク上流社会でももっとも富裕なラルストーン家の妻として「25歳で、二児の母親で、たくさんの小遣いを持ち、広く一般にもっとも美しくもっとも人気のある『若奥様』の一人と認められた」(86)ディーリアは、家父長制社会でもっとも理想的な女性と表現されるが、ウォートンはこの強要された理想像から逃げだしたいという衝動にときどき駆られるディーリアを次のように描く。「彼女の体内でまるで翼のように鼓動する、あの音を弱めた鍵盤の震え、あの密やかな問い」(87)に心乱れるとき、ディーリアは「子どもや、家事や、新しいドレスや、やさしいジム」(87)のことを考えることで気を静めるのだという。母親であり、家庭を守り、経済的に恵まれ、夫のいる身であることが自分を規定するすべてであると言ひ聞かせようと努めても、それらはディーリアのすべてを内包するものでないことは明らかである。では、具体的に「あの密やかな問い」とはどのようなものなのであろうか。

家父長制社会が継承されていくためには、なにより父親にとって疑いの余地のない嫡出男子が確保されなければならない。その目的を達する手段は、家父長がその家族の女性の自由な性的活動を厳しく管理することである。もし管理が十分でなければ、母系でしか確認できない性的自由の世界となり、それは家父長制の崩壊を意味する。そのため女性は「家庭の天使」とされ、性的言動を禁止され、男性の求める家庭の純潔と純血は維持されるようになった。二児の母親となつたディーリアが今も「驚くほどういしい」(87)と表現されるのはまさにこのことを示しているといえよう。

だが女性を、「純潔」で庇護を必要とする弱々しく非人間的で不自然な存在にした男性は、その欲求不満をみたすために、「聖なる家庭」以外で、自分の身体を売る女性を相手にすることになる。男性だけに許されたこの性道德の二重規範については、作品中、ディーリアとシャーロットが女性だけの私的な空間にいて口にする場面が描かれるだけでなく、シャーロットが結婚を断念せざるをえない理由であり、後にティーナの破談の危機を招く理由でもある。つまり、作品展開の要として扱うことで、女性の生き方に制限を加える悪弊としてウォートンが考えているのは明らかである。

ディーリアのもとにシャーロットが駆けこんで、週内に迫った結婚を否定したとき、ディーリアが最初にその理由と疑ったのは「『ジョーの過去』」(94)である。「『たとえ彼に…子どもがいることをあなたが耳にしたとしても—もちろん、彼はすでに必要な手はうったでしょうから…』娘(シャーロット)は首をふった。『わかっているわ、それ以上言う必要はなくてよ。＜男性とはそういうもの＞、でもね、そんなことじゃないの。』」(95)二人のこの会話は矛盾にみちた性道德の二重規範を認識しながらも受容せざるをえない現実を示す。未婚女性には純潔を、既婚女性には貞節を厳しく求めながら、男性は婚外子をもうけても許されるのである。

シャーロットが祖母から与えられたわずかなお金でやりくりする託児所で育つ子どものうち一人が、彼女自身の婚外子であることをディーリアはこのとき初めて知らされる。結婚して嫡出子が生まれたとき、託児所の子どもから伝染病がうつされる可能性を危惧するジョーと彼の母親は、シャーロットに託児所の世話を断念するよう説得するが、実子であるティーナを含む子どもたちを手放すことがシャーロットにできるはずもない。ジョーが婚外子をもうけていることは周知の事実として語られるのに、シャーロットが婚外子を産み育てていることは極秘として隠蔽されている。同じ行為の同じ結果を分けるのは当事者の性差のみである。「社会的寛容は男性と女性に同じ尺度では施されなかったし、ディーリアもシャーロットもそれがなぜかといぶかったことすらない。彼女たちの階級の若い女性が皆そうであったように、二人は避けられないことに

は単に従ったのだ。」(114) シャーロットの託児所運営に対する熱意は「家庭の天使」的献身ゆえだと信じこむジョーの家父長的発言は明快である。「『僕は自分のいとしい女性の無知、世間知らず—気高い純潔をすべて容認していますよ。自分の未来の妻が—そうでないことを望む男性なんてありえないでしょう?』」(115)

シャーロットの衝撃的秘密を知ったディーリアが、ジョーとの結婚を阻止するのは、ラルストン家の名誉と秩序を守るためでも、性的に不道德なシャーロットへの嫌悪感からでもない。シャーロットの不義の相手がクレメントであったことへの嫉妬心からである。「時計を見るといつもクレム・スペンダーを想う」(99) ディーリアや「自分がクレムの妻であり、自分の子どもが彼の子である」(99) とまで想像するディーリアは、実際にクレメントと婚外交渉をもちティーナを産んだシャーロットと、道徳的にどれほど大きな違いがあるのだろうか。「家庭の天使」がディーリアの演じる役割にすぎないことは、不義の相手を隠そうとするシャーロットを問いつめるディーリアに、「突然すさまじい女の直観があがきつつ目覚めた」(101) という描写に明らかである。これは、いとこのすべてに勝っていると信じていたディーリアが、クレメントの子どもを産んだという点で、シャーロットに敗北感と嫉妬を覚えた瞬間であったのだ。

しかし未婚の純潔なシャーロットに、クレメントとの行為のための、「彼らの密やかな喜びを隠す」(154) どのような時間と空間が与えられたのか、という疑問をディーリアが解いたのは、さらに二十年ほど後のことである。性に関する疑問を内に秘めて生き続ける「家庭の天使」は、どれほどの心理的抑圧に苦しまなければならないのであろうか。問題は、「人目にさらされたこじんまりした小社会」(154) に同じように属しながら、なぜシャーロットにだけこのような体験が可能であったかである。

ウォートンは家父長制社会が性差別の上に成りたっているだけでなく、男性が「聖なる家庭」外で相手にする女性の存在そのものにも責任を負っていることを示そうとした。彼らが自分と同じ社会階級の女性は嫡出子を産むべき対象として限定する目的で「家庭の天使」として私的空間に囲いこんだ結果、自分

たちの欲求不満解消の対象を別空間に必要とすることになった。この女性の二極化が、ディーリアの上流社会内でも、実はおこっていた。30歳にして肺病で亡くなったシャーロットの父親は「『貧しいラヴェル家』」(90)の出身で、「舞踏会をあきらめた」(90)長女のシャーロットは「オールドミス<sup>7)</sup>になることが、親族では暗黙のうちに了解されていた」(90)という。先祖から受け継いだ財産がないため、おそらく満足な療養も受けることなくラヴェル氏は若くして亡くなり、残された子どもたちは経済的・社会的苦境に立たされるという、負の連鎖反応だ。ディーリアに失恋したクレメントが、耳の遠くなった祖母宅に住むシャーロットと婚姻外の性を享楽したのは、彼女が父親の監視の目がなく(=性的規制のない)、経済的支えもない(=良縁が望めない)女性であることに乗じたからにはほかならない。親の社会的・経済的地位がそのまま子どもに継承されていく不条理は、その恩恵に与らない者だけが味わう苦悩を伴う。

シャーロットの婚外子ティーナはしたがって、すでに人生の出発点において本人の責任とは関わりのない不利な条件を背負わされている。シャーロットの育った環境は決して恵まれたものではなかったとしても、少なくとも彼女は出自のはっきりとしたラヴェル家の一員である。亡き父親と同じ肺病の兆候を見せたことを口実にジョージア州に療養に行ったシャーロットは、ティーナを極秘に出産し、ニューヨークへ戻ってから託児所を開く。ここで育てられた出自不詳のティーナは、なにより表向きの性道徳を重んじる社会でもっとも容認されがたい存在だ。彼女自身にはなんら責任がなくても、この社会においては彼女の存在そのものが罪である。「ティーナは結婚年齢に達しており、称賛され、もてはやされたが、彼女に伴侶を見つける見こみなどあるだろうか」(133)と表現されるように、ティーナは性の享楽の対象として利用されながら、結婚を前提とした「家庭の天使」候補には含まれない、性道徳の二重規範の犠牲者そのものとして描かれる。だが、ウォートンはティーナに母親と同じ運命をたどらせはしない。

ディーリアの養女となったクレメンティーナ・ラルストン嬢は、the Halseys (ホールズイ家)に快く嫁として迎えられる。「ホールズイ家の一員が



もう一人ラルストン家の一員と縁組するより望ましいことはありえない。両家はいつも姻戚関係をもってきたのだ。」(167) 姓が変わったところでティーナの本質が変わろうはずもないが、ラルストン家の養女となったことで彼女を嫁に迎えるホールズィ家の形式主義は、ニューヨーク上流社会の形骸化を端的に現しているともいえよう。しかしディーリアは、実はティーナがスペンダー家とラヴェル家の子孫であることを承知しているわけであって、結局のところ、家父長制の実質的崩壊を招かない範囲内での決断しか下してはいない<sup>8)</sup>。ディーリアが婚姻によって得たラルストンの名前と、ラヴェル家より継承してきた相続遺産が、ティーナの世代を通じてさらに次世代へと継承されていくであろうことを示唆することで、家父長制度の存続が洞見される。

ティーナは実母と同じ「オールドミス」としての孤独な人生を甘受する必要はない。シャーロットの果たせなかった結婚、すなわち妻となり、母親となる社会的・経済的基盤を手にしたことは家父長制社会での居場所を確保したという点で重要な意味をもつのである。

## II

『二人の母—1850年代』をディーリアとシャーロットの、ティーナをめぐる対立という観点で読むとき、作品は大きく二度の危機で分けることができる。ひとつめの危機は、1840年代に設定された第一部(1~5章)で起き、ディーリアがシャーロットの人生に介入して、「オールドミス」としての生涯を決定づけた時点で終わる。シャーロットの「『私はみんなと同じように結婚して一妻になりたいの。』」(100)との願いを、ディーリアが断ったのはなぜか。家父長制社会でディーリアが演じる「家庭の天使」は、建前としてシャーロットの健康不安を挙げる。嗜血したシャーロットの、母親になることができない可能性は、家父長制社会の崩壊につながる最大の懸念であり、結婚を断念させる最良の説得条件たることを、ディーリアは見逃さなかった。しかし本音は、今も想いをよせるクレメントと、自分もたなかった体験を共有したシャーロットに

抱いた嫉妬にある。「『彼女（シャーロット）はひどく年老いて醜く見えること！ これまで以上にオールドミスみたいだわ。』」（96）との、ディーリアの優越感は、シャーロットがクレメントの子どもを産んでいた事実を知ることによって無残にうちくだかれる。

「家庭の天使」となるように育てられた純潔な女性は、厳しい性道徳に縛られており、結婚という制度にのらなければ処女喪失はありえなかった。したがって、結婚適齢期（外面的な若さと美しさを備えた年齢というだけでなく、生物学的に出産可能な年齢でなければならなかったはずである）を過ぎた独身の女性を意味する「オールドミス」には、性の経験をもたぬまま、すなわち家父長制社会の規範である妻・母親にならぬまま、年老いていく女性に対する、明確な排除・差別意識がこめられている。ディーリアの、シャーロットに対する優越感は、ニューヨーク上流社会で若いころから「オールドミス」としての人生を決めつけられていたところへの偏見に根ざしていたわけである。

しかし一方ですで見えてきたように、ディーリアは「家庭の天使」を演じてただけで、クレメントへの想いを捨てきれずにいたのであり、性道徳を犯したいところに対する嫌悪感・不信感ではなく、むしろ嫉妬が、ティーナを守らなければならないという決意に昇華される。これはシャーロットの告白を聞いた直後に託児所へ走り、数多くの子どもの中から「クレメント・スペンダーそっくり」（107）の女兒を見つけだして抱きしめたディーリアの行動に明らかだ。「クレメント・スペンダーの赤ちゃんを救うこと」（112）は、彼へのディーリアの不変なる愛の証であり、ティーナが成長してシャーロットをではなく、ディーリアを母親として見なすことで、クレメントを略奪したシャーロットへの懲罰的効果が高まるのである。

ではシャーロットはなぜ、自らディーリアにティーナの母親が自分であることを告白したのであろうか。シャーロットは娘と共に暮らすために、ジョーとの結婚を断念した。つまり母親であるために、妻となることを放棄したわけである。極秘でティーナを出産し、母親という形でなくティーナを育てているシャーロットは、家父長制社会が認めていない女性の生き方を選択することの苦

悩をだれよりも痛切に味わっており、女兒であるゆえにことさら将来が不安なティーナを、母親として見守りたかったのだ。彼女が結婚の機会を失ったことは、結果的にティーナの母親としての地位を確保したことを意味している。

作品はここで第二部（6～11章）に移り、時代設定も1850年代に時を進める。作品には描かれないものの、ジョーとの破談後の五～六年間だけが、シャーロットにとって母親業を満喫する貴重な歳月となる。それは作品の最後で、シャーロットが諦観して『『結局、彼女（ティーナ）が幼かったとき、あの子は私のものだったのですもの！』』（179）と語ったことばに明らかである。というのも、ジムの落馬死亡事故以降、シャーロットとティーナはラルストン家に移り住み、ディーリアの二人の子どもと共に仮の家族を形成することになるからだ。このときからディーリアとシャーロットの役割分担がはっきり二分化される。ティーナはディーリアの二人の子どもを自然に倣って、「ディーリア・ラルストンを『ママ』、シャーロット・ラヴェルを『チャティおばさま』と呼んだ。」（129）クレメントの娘の母親役を演じるディーリアと、実子の叔母役を演じるシャーロットの奇妙な関係がクライマックスを迎えるのは、ティーナが少女から女性へと移行する時期である。

ディーリアの演技を支える重要な柱は、シャーロットへの嫌悪感だ。「彼女（ディーリア）はシャーロットがティーナの母親であるために彼女を嫌悪する瞬間さえあった。」（132）ティーナの母親に対する愛を自分のものとすることは、クレメントの愛を自分のものに奪いかえすことを意味していた。また、ティーナが母親としてのディーリアになつけばなつくほど、シャーロットを心理的に苦しめ、ディーリアの敗北感は和らぐ。理想的な「家庭の天使」予備軍に育ったyoung Delia（ディーリアの実の娘）は、母親の期待をうらぎらないが、その自由な発想でディーリアを楽しませるのはむしろティーナである。つまり、ディーリアは自分になりたいとおそらくなれなかった情熱的でいきいきした女性をティーナに見いだしているのだ。むろん、出自不詳のティーナであるからこそ、ニューヨーク上流社会での自由なふるまいを看過されるのである。成長したティーナとディーリアとの心理的距離はますます近づき、反対に「オー

ルドミス」である叔母からティーナの心はますます離れていってしまう。実母とは知らずにシャーロットを「オールドミス」扱いするティーナをたしなめるとき、ディーリアの虚栄心はどれほど満足させられたことであろうか。「娘は悔恨の念でいっぱいだった。『あら、本当にごめんなさい！ 私が彼女はオールドミスだと言ったからかしら？ でも、ママ、おばさまはそうですもの、ね？ つまり心の奥深くで、よ。おばさまは若かったことなんてない—楽しいことや、称賛や、恋することなんて考えたこともないって、私、思うの—でしょ？ だからおばさまは絶対私を理解してくれないし、大好きなたいせつなママ、ママはいつも理解してくれるのよ。』」（130）若い娘にとって、家父長制社会で「オールドミス」になることがどれほど異質なことと考えられていたかが、ティーナの口を借りて語られる。男性によって認められ、求められてはじめて女性としての本分を発揮できる社会で、「オールドミス」とは忌避すべき存在であった。

シャーロットの立場はさらに複雑だ。「あの隠された絆」（132）をティーナに悟られぬよう「『こっけいな、狭量なオールドミス』」（131）を演じ続けるシャーロットを支えるものは、ティーナを守る母親の犠牲的愛である。ティーナの結婚式前夜の「『長年、あの子があなたを<お母さま>と呼ぶのを耳にするのはたやすいことだったと思って？』」（176）というシャーロットの悲痛な詰責が示すように、彼女にとっては自己否定につながる辛酸の日々であった。にもかかわらず、シャーロットがオールドミスの叔母役に徹したのは、ティーナに自分ひとりでは与えることのできない経済的・社会的安定を確保できること、また、自分自身の過去の情熱的な生き方を隠す手段でもあり、ティーナに自分との関係を疑わせないための防御壁ともなったからといえよう。しかも、心の奥底では、ティーナが自分の娘であるとの隠れた誇りが、生きぬくために強い支えとなっていたことは明らかだ。シャーロットにとってこの仮面はありのままの自分を隠すにまことに都合よく、「彼女はますます典型的なオールドミスになっていった。かたくるしくて、きちょうめんで、細かなことに気をとられ、社交上と家庭内のささいな慣例をうるさいほど重視した。」（128）

初代ラルストンの望んだように、ディーリアの息子がthe Vandergraves（ヴ

ァンダーグレイヴ家)の令嬢と、続いて娘がホールズィ家の令息と結婚すると、加齢を自覚するディーリアにとって、ティーナはいやますに自分が過去に実現できなかった夢を託す相手になっていく。「自分のもみ消された青春時代の理想像、切望、想像のすべて」(168)をティーナが見せてくれるのだから。しかし、ティーナが青春を謳歌するとき、二度目の危機が訪れるのである。

「結婚適齢期」を迎えたティーナに現実的母親としてすばやい対応をしたのはシャーロットであった。彼女はディーリアの娘が嫁いで空き部屋となったティーナの隣室に、自分の寝室を移動する。かつて自分がそうであったように、ティーナが男性の性道德の被害者となることを危惧したのだ。ティーナが称賛されるほどに美しいものの、出自不詳ゆえに、ニューヨーク上流社会では「家庭の天使」として迎えられないことを承知しつつ、むしろ、いつも彼女がそばにいて自分の老後の寂しさが紛らわされることを期待するディーリアには、利己的で所有的母親像がみられる。シャーロットは、ティーナの恋人 Lanning Halsey (ラニング・ホールズィ)が、性道德の二重規範に従って行動していることを見逃さない。『彼(ラニング)はティーナと結婚しないと決めているのよ。でも同時に—あの子と会うのはやめないとも決めているわ。』(143)さらに、これはラニングに限ったことではない。『ディーリア、あなたは私と同じくわかっているはずよ。ティーナを恋するような若い男性は皆、彼女と結婚しない好都合な理由を見つけだすことを。』(143)

自分が過去に犯した罪を娘ティーナが背負わなければならない不条理を、母親としてシャーロットは受け入れることができない。ラニングも、さらにティーナが身を置くニューヨーク上流社会も、「家庭の天使」以外を受けいれないと承知しているシャーロットは、『私の子どもにはあの子の人生を送らせるわ…あの子自身の人生を…たとえ私がどんな犠牲を払っても…』(144)との決意をし、『質素な生活を送っている質素な人々のところへ、彼女(ティーナ)が夫を見つけ、家庭を築けるところへ』(146)出ていこうとする。ティーナにニューヨーク上流社会外とはいえ、「家庭の天使」たる未来を用意することによって、シャーロットは自分の過去のあやまちを正そうとしているのではな

いだろうか。しかしそれはまた、ディーリア以外には決して母親としての自分を出すことを許されていないシャーロットが、ティーナに出自を明かすことにもなってしまう。

舞踏会から明け方に帰宅したティーナとラニングを寝ずに待ちうけることで、二人の婚外交渉を阻止する母親シャーロットの姿は、純潔・貞節という性道徳を遵守してきたディーリアに「聖なる家庭」の外の世界の現実を初めて認識させる。捨て身で娘の処女喪失を防ごうとするシャーロットの姿が、いよいよ二度目の危機へとつながるディーリアの決意を促す。ディーリアはティーナをラルストン家の養女にし、母方の先祖からの遺産である「ラヴェル家のお金」(161)を分け与えることにする。この行為は「気の毒なジムの思いもよらない『過去』に関する噂」(165)の種となり、「彼女(ディーリア)の二人の子どもたちから別の態度」(166)も誘発するが、ティーナを失うことほどにはディーリアにとって重要な意味をもたない。つまり、結婚以来ラルストン家の価値観に従い、伝統を継承してきたディーリアが、夫より(ただし夫はすでに死亡している)、実子より(ただし二人ともすでに理想的な結婚をしている)、クレメントの娘を選んだのだ。それによってシャーロットを「自分の子どもが二人の絆を決して疑わないことが哀れな女性の主な目的となった…」(168)という苛酷な心理状況に追いやることに成功する。ディーリアはシャーロットとティーナの親子の絆を断ちきりたかった。

そして作品は最後のクライマックスを迎えるが、シャーロットの結婚を阻み、ティーナを養女にした、シャーロットの人生へのディーリアによる二度の決定的介入が、このクライマックスへとつながったことはいうまでもない。ティーナとラニング・ホールズィとの結婚式前夜、母親として「子どもに新しい義務と責任に関して言うべきことば」(172)を担うのはどちらであるかをめぐる二人の母親の闘いは、表面的にはむしろ、シャーロットを不利な立場に追いやる。「オールドミス」であるはずのシャーロットが、結婚に伴う妻としての性的義務についてティーナに教えることは不可能だからだ。なおシャーロットがこの役割を遂行するならば、ティーナのアイデンティティ喪失という大きな犠牲を

払うことになってしまう。ティーナを想うシャーロットの母性愛が、結局この役割をディーリアに譲る決意をさせる。だがかつて、シャーロットがディーリアにクレメントとの関係を告白したのは、『『ティーナにもうひとりの母親を与えることになる』』（175）と覚悟したうえで、ティーナの人生にプラスとなると計算した結果であり、ディーリアの二十年間の行為がすべてクレメントに対する愛の証としてなされたことも、シャーロットは看破していた。ディーリアは結局、シャーロットの意図のまま動かされていたことになる。

二人だけで送ることになる老後の寂しい生活が、双方に与える精神的苦痛を想像させて作品は終わる。「明晩この家は空っぽになる。死ぬまで彼女とシャーロットは夜の灯火のそばで、二人きりでいっしょに座っているであろう。」（170）しかしディーリアは最後の瞬間まで母親の座を譲りはしない。ティーナに挙式後、家を去る前に『『シャーロットおばさまに最後のキスを——一番最後のキスをすることを忘れないでね。』』（180）と、寛容な母親役を演じきることで、ディーリアはシャーロットへの敗北感を紛らわそうとしているのだ。

### おわりに

『二人の母—1850年代』は、ティーナをめぐる、母親役を演じるディーリアと「オールドミス」を演じるシャーロットの心の葛藤を描いた作品である。母親の世代の「結婚適齢期」と娘の世代のそれとに焦点をあわせることで、「家庭の天使」であることだけが女性の生き方であった時代にあって、人生のこの時期が女性にとってもっとも大きなターニングポイントであったことをも示している。この時期に決定された人生航路を当人が変えることは不可能であった。

ディーリアとシャーロットは一見、大きな相違点を抱えている。ディーリアはニューヨーク上流社会が理想とする「家庭の天使」として、社会的・経済的に恵まれた生活を送り、いとこのシャーロットは「オールドミス」として妻となること、母親となることを許されない生活を送る。しかし、家父長制社会が

それぞれに課した役割を演じつつ、その犠牲となった点で、二人は共通しているのである。若きディーリアは、クレメントを選択することによって自分が置かれる社会的・経済的状況を恐れ、老年期になってからは、熱い想いを内に秘めたまま老いていくことの焦燥感に苦しむ。若きシャーロットは、妻となり母親となる機会を拒まれることの絶望感を経験し、娘が「結婚適齢期」を迎えてからは、その出自ゆえにティーナが自分と同じ運命を歩まなければならないことを恐れる。つまり、ディーリアの人生はクレメントへの愛を犠牲にした上に成りたち、シャーロットの人生はティーナの母親としての自己を犠牲にした上に成りたつ。しかも、二人とも生涯その犠牲の代価を払い続けて生きていかねばならない。

このようにそれぞれ苦悩を抱えた二人が、互いに嫉妬と悪意を覚えつつ共同生活を送る苦しみを描きながら、実はそれが家父長制社会によって女性にもたらされた歪みであることをウォートンは示す。この作品をラルストン家の歴史で始めたのは、四代目に嫁いだディーリアが、家父長制社会の価値観・生き方を継承することで味わう苦しみを描くためである。シャーロットの産んだ子どもが女兒であるという設定も、母親世代の苦しみが、子世代へと受け継がれる容赦ない事実を示すためである。出自不詳であるゆえに、むしろディーリアが憧れるいきいきとした生活を送っていたティーナが、養女となり、ラルストン家同様に伝統主義を守るホールズィ家の嫁となったことは、さらに新たな「家庭の天使」誕生を示唆する。また、互いに自己犠牲を払いつつ、共に老年期を過ごすディーリアとシャーロットは、連綿と続く女性の苦悩を代弁する。しかし結局、結婚市場で勝ち組みとなって、子どもを産むという限定された女性の生き方を変えない限り、ディーリア、シャーロット、ティーナが共有する苦しみから女性は解放されないと、ウォートンは訴えるのである。「家庭の天使」ディーリアと「オールドミス」シャーロットは結局、お互いに影の自分であるにすぎないのだから。



## 註

- 1) R.W.B. Lewis and Nancy Lewis ed., *The Letters of Edith Wharton* (New York: Scribner's, 1988), p.441
- 2) Shari Benstock, *No Gifts from Chance: A Biography of Edith Wharton* (New York: Charles Scribner's Sons, 1994), p.365
- 3) James W. Tuttleton, Kristin O. Lauer and Margaret P. Murray ed., *Edith Wharton: The Contemporary Reviews* (Cambridge: Cambridge University Press), pp.359-360
- 4) Edith Wharton, *Old New York*(Includes *The Old Maid*). (New York: Scribner's, 1951), p.83 なお、*The Old Maid*: 'Fiftiesからの引用についてはすべてこの版により、本文中には頁のみを記す。
- 5) たとえばLewis, *Ibid.*, p.458や、Cynthia Griffin Wolff, *A Feast of Words: The Triumph of Edith Wharton*(New York: Oxford University Press, 1977) , p.357など。反対にAdeline R. Tintner, "Mothers, Daughters, and Incest in the Late Novels of Edith Wharton." In Cathy N. Davidson and E. M. Broner ed. *The Lost Tradition: Mothers and Daughters in Literature*(New York: Frederick Ungar, 1980), pp.148-149では、デイリアの視点を中心と考えた作品論が展開されている。
- 6) Lewis, *Ibid.*, p.458
- 7) 作品のタイトルにもなっているold maidの訳語として用いる。「オールドミス」とは角川類語新辞典の定義によれば結婚適齢期を過ぎた独身女性をさし、「老嬢」ともいう。また、三省堂新明解国語辞典には、改称として「ハイミス」の記載もある。いずれも成人女性を未婚者と既婚者に区分し、ある特定の時期を過ぎても未婚である女性をさして使用されたことばであるが、成人女性は結婚するものであり、既婚女性だけに処女喪失が許されるという、社会的・文化的差別意識が内包されており、今日の社会では死語である。英語ではさらに、未婚Missと既婚Mrs.のどちらかを敬称とし

て用いることで、成人女性の区分を明確にしていたが、女性差別を解消する流れの一環として、未婚・既婚を区別せずに用いる敬称として合成語 Ms.をつくり、1973年以降国連でも正式に採用されてきた。なお、本作品中でold maidと同義語として一度だけspinsterhood (154) が用いられている。

- 8) Jessica Levine, *Delicate Pursuit: Discretion in Henry James and Edith Wharton* (New York: Routledge, 2002), p.56によれば、ティーナの結婚はニューヨーク上流社会の階級の壁を崩すきっかけになるとあるが、ティーナは血縁から言えば実際には上流社会の一員である。